

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：24102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23792659

研究課題名（和文） 早産児の母親の母乳育児の過程における親役割獲得に関する研究

研究課題名（英文） Maternal role achievement in the process of breast-feeding among mothers of premature infants

研究代表者

田中 利枝（TANAKA RIE）

三重県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：90515793

研究成果の概要（和文）：早産児を出産した母親が、児のNICU入院中に、母乳育児を通して親役割を獲得していく過程を明らかにするために本研究を実施した。その結果、母乳育児を通して、母親は【母乳が出る自己と出会う】、【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】、【母親としての自己像に接近していく】、【退院を目前に母親である自己がゆらぐ】、【自己肯定感を得てわが子を育てる決意をする】という過程をたどっていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study was performed to elucidate the process whereby mothers of premature infants achieve the maternal role through breast-feeding while their babies are in the neonatal intensive care unit (NICU). We found that mothers went through the following steps in the breast-feeding process: “encountering the self that can produce milk”, “wrestling with the self that must continue to produce milk”, “accessing their self-image as a mother”, “faltering as a mother at the prospect of their baby being discharged from hospital”, and “acquiring self-esteem and determination to bring up their child”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：早産児・母親・母乳育児・親役割獲得

1. 研究開始当初の背景

妊娠から出産への心理的過程として、母親は初めて胎動を感じた時、自分と別の生命が胎内に存在していることを強く実感し、これから生まれてくるわが子を具体的にイメージし、子どものいる生活や家族の絆、役割を強く意識するようになる。また、妊娠週数を経る過程の中で健康なわが子の姿を想像し、出産に向けてわが子への愛情を高め、わが子と対面する心の準備を進める¹⁾。一方で、早産児を出産した母親は、自分のイメージした妊娠・出産・育児とは異なり、思いもよらな

い妊娠の中断から、ショック、子どもの死や障害への予期的悲嘆、児に対する罪悪感、悲しみ、自責の念など、危機的で複雑な心理過程をたどりながらも、わが子を受容し、わが子との関係性を構築し、母親としての新たな役割を獲得していかなければならない。

母乳育児は、母乳を我が子に与えようという意識をもつことから始まり、児に話しかけ、触れ、児の反応を読み取り、母子間の重要な行動をすべて含んだ行為であり、母乳を与えるのは、その子の母親だけであるという事実も極めて重要である²⁾。多くの母親にと

って、母乳育児の成功は、母親役割の一部であり、母乳育児に問題が生じると、母親は自分自身の母親としての能力に疑問を抱くことから、母乳育児の体験と母親役割獲得には大きな関連性があることが明らかとなっている³⁾。

早産児の母親も、児の生命に確証を得る前から母乳育児行動を開始しており、児の身体的機能が不安定な時期の児の死に対する予期的悲嘆の段階から、母乳を児に届けることを通じて児との関係を形成していこうとしている⁴⁾。しかし、実際、母乳の必要性が強調されるあまり、母親の母乳育児に対する希望や思いの表出がされないまま、児に対する自責の念から、義務のように搾乳を継続する中で、精神的に追い込まれ、孤独に搾乳をする母親もいる⁵⁾。また、早産児の母親に関わる専門職も、母親の母乳分泌を促すために、できるだけ早期に搾乳を開始する重要性を理解していても、母親への心理的配慮から、介入する困難さを感じている⁶⁾。

NICUの母乳育児支援に関する先行研究は、実態調査や看護ケアに関する内容が多くを占めており、母乳育児の主体である母親の体験や認識、思いに触れた研究は見られない。母親の母乳育児の過程における体験や認識、思いが明らかになっていない段階では、精神的サポートの方向性も見えないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、早産児の母親が、母乳育児を通して、親役割を獲得していく過程を明らかにし、看護支援の方向性を考察する。

3. 研究の方法

(1) 研究参加者

A病院において在胎週数23週～28週の早産児を出産した母親6名。

(2) 調査方法

医師から退院について説明がなされた、退院指導をすすめている、退院前検査の予定が入った、退院前の母児同室の予定が決まった等の情報をもとに、退院前の面接時期を決定した。自作のインタビューガイドを用いて、NICUの面談室で40分程度の半構成的面接法を実施した。面接内容は「妊娠中の母乳育児に対するイメージと認識」、「母乳育児の場面における母親の気持ち」、「母乳育児を通じた母親としての赤ちゃんに対する思い」、「母乳育児を通じた母親としての自分自身への認識」等とした。語りの内容は、研究参加者の了解を得て、ICレコーダーに録音した。

(3) 分析方法

半構成的面接法により得られたデータは、

母親の母乳育児を通じた思いや認識に関する内容をコード化し、サブカテゴリーを抽出した。各研究参加者から得られたサブカテゴリーの同質性と異質性に基いてカテゴリーを抽出し、全体分析を行った。得られたコアカテゴリーを用いて、早産児の母親が母乳育児を通して親役割を獲得していく過程を明らかにした。分析結果の真実性・信憑性確保のため、母性看護学の専門家からスーパーバイズを受けた。

(4) 倫理的配慮

研究参加者への説明は文書および口頭で行い、書面で同意を得た。三重県立看護大学研究倫理審査会（通知書番号：110703）および研究協力施設の倫理審査会（受付番号：08-7）で承認を経て実施した。

4. 研究成果

〔研究結果〕

(1) 研究参加者の概要

研究参加者は、23～39歳の初産婦6名。妊娠25週で出産した母親3名、妊娠26週で出産した母親2名、妊娠28週で出産した母親1名である。全員、帝王切開術で出産し、児の生後1日目までに母乳栄養を開始している。直接母乳を開始した時期は、生後55～94日目であった。面接時期は、産後78～126日目であった。

(2) 早産児の母親が母乳育児を通して親役割を獲得していく過程を構成するコアカテゴリー

全体分析の結果、抽出されたコアカテゴリーについて、それらを構成するカテゴリーを用い、説明する。記述中における【】はコアカテゴリー、『』はカテゴリーである。

① 【母乳が出る自己と出会う】

母親は、意識が朦朧とする、発熱と痛みを苛まれる状況の中、看護師に搾乳をしてもらおうというように『帝王切開術後に看護者主導の搾乳に身を委ねる』ことで、母乳育児を開始していた。また、普通に産んでいない自分から母乳が出たことに驚くとともに、いつの間にか、わが子のためにおっぱいをあげなきゃと思えた自分に気付くなど『母乳にまつわる心身の変化を不思議に思う』ことにより、母乳が出る自己に出会っていた。

② 【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】

母親は、児の命の源である母乳の力を確信し、小さく生まれた児のQOLを求め『児の命を培う母乳にこだわる』。嫌々搾乳する自分が嫌になる、周囲の助言通りに搾乳できないことに対する自責の念が生じるなど『搾乳への義務感にかられて自分を追い込む』。経管栄養では母乳をあげている実感が持てない

など『母乳をあげている実感が栄養方法に左右される』状況の中で、『母乳分泌量に一喜一憂する』ことを繰り返し、母乳をあげることができなくなる自分を想像しながら『母乳が出なくなったら母親としての価値がない』と思うなど、母乳を出し続けなければならない自己と格闘していた。

③ 【母親としての自己像に接近していく】

母親は、児に優しい出産ではなかったからこそ母親にしかできない母乳育児をしてあげたい、母親だからこそ児の命を育むために身を削る思いで母乳育児が継続できるなど『児の母親だからこそ母乳育児ができる』という思いで、母乳育児を継続していた。やっと直接母乳ができるようになり、自分にしかできない『直接母乳を通して母親としての実感が生じる』体験をし、母親としての自己像に接近していた。

④ 【退院を目前に母親である自己がゆらぐ】

退院前、『直接母乳を繰り返しながら児のいる生活を身近に感じる』ことで、児の退院を前にした安堵感やスタッフから引き継いで児を順調に育てる自信のなさというような『退院への安堵感と児との生活への予期的不安』が生じていた。また、小さく生まれた『児の急変に対処できるか不安になる』こともあった。さらに、児の入院中に自分の生活が優先されていたことから、児と一緒に生活するという実感が湧かない、母児同室体験から母親としての自覚の足りなさに気付くというように『母親になりきれていない自分に気付く』ことを通して、児の退院を目前に母親である自己がゆらいでいた。

⑤ 【自己肯定感を得てわが子を育てる決意をする】

おっぱいを吸ってくれる児に触れて、これまでの搾乳継続を意味付ける、三日坊主の自分が搾乳をコンスタントに継続してこられたことを自負する、小さな児の正常な発育のために母乳をあげられてよかったと思うなど、母親は『児の成長につながる母乳育児を継続した自分を肯定する』ことで、前向きな気持ちになっていた。また、二度と失敗のないように児を大切に育てていこう、児を守っていこうという気持ちが芽生え、自己肯定感を得て、『現実を受けとめ、わが子を育てていこうと決意する』に至っていた。

⑥ 【母乳育児が空想から現実になっていく】

母親は、妊娠中、乳房形態維持のために母乳育児を軽く考える、助産師からの保健指導により母乳育児に対する意識が芽生える、できたら児を母乳で育てたいと思うなど『妊娠中に母乳育児を空想する』ことをしていた。実際に、母乳育児が開始してからは、母乳が児にとってそんなにもいいと思っていな

かった、母乳育児において搾乳をすることは考えていなかったなど、イメージと現実との違いから『わが子への母乳育児を通してイメージが修正される』ことで、母乳育児が空想から現実になっていった。

⑦ 【児がかけがえのない存在になっていく】

出産後、イメージしていた赤ちゃんと違う児を受けとめられず、児を産んだ実感がないながらも夫に似ている児をうちの子と思うなど『目の前の児がわが子であることへの不確かさ』が生じていた。また、消えそうな児の命にすぎる思いなど『小さく生まれてきた児の状態への不安』があった。同時に、児が生きてここにいる嬉しさ、児の面会に行きたくて必死に離床するというような『生きている児への高まる思い』も生じていた。児の入院中、ストレス発散のための気分転換を行う、色々なことに目を向ける生活を送るなど、『児と離れて生活する現実に対処していく』中で、『離れている児のことが気にかかる』、『児と離れて搾乳をすることで切なさが募る』というように、母親の中で、児がかけがえのない存在になっていった。

⑧ 【喪失体験にとらわれ続ける】

母親は、心の準備ができないまま緊急帝王切開となり、あつけなさ、児と切り離された寂しさなど『突然の出産に伴う喪失感を抱く』状況であった。また、満期まで児を守りきれず、ひどい目に合わせてしまったという自責の念、児が無事に成長して大人になったとしても、早産したことは頭の片隅から消えることはないといった『早産したことへのしよく罪の念を抱き続ける』ことで、喪失体験にとらわれ続けていた。

⑨ 【母乳を出し続ける力が引き出される】

児に母乳を届けることが仕事、児にしてあげられることは母乳を届けてあげることだけと『児のために唯一できる搾乳を継続する』、母乳外来の受診や食生活の工夫など『母乳育児にいいと思えることをやってみる』、必死に生きようとする児の頑張りに比べたら、自分ももっと頑張れると『児の頑張りに触発されて必死に搾乳する』など、母親は『児の成長とともに母親としての力が引き出されていく』体験をしていた。

⑩ 【直接母乳を通して絆が深まっていく】

直接母乳が上手になりたくて、毎日面会に来て、試行錯誤しながら『直接母乳ができるように2人で練習を重ねる』中で、親子の触れ合いの大切さを感じるとともに、『母乳育児が母子のつながりを生み出す』ということを実感していた。さらに、母子相互作用への喜びを感じる、母乳を出す自分と吸啜する児のバランスの重要性に気付くなど『直接母乳を通して一体感が高まっていく』ことで、母親と児との絆が深まっていった。

⑪ 【母乳を通して成長する児に鼓舞される】

母親は、『母乳摂取量の増加に反映される児の成長への嬉しさ』、『経口哺乳に移行していく児を見守る嬉しさ』、児が『直接母乳というスタートラインに立てた嬉しさ』など、母乳育児を通して成長する児に対する嬉しさを感じていた。また、直接母乳ができるようになって、児が力強くおっぱいを吸うというような児から発信される能動的な力により『直接母乳を通して児の持てる力を実感する』ことで、鼓舞されていた。

⑫ 【周囲の存在を自己の支えとしていく】

家族の不用意な発言に対して傷つく、友人から児を出産した母親として扱われていない感じがするなど『周囲にありのままの自分を受けとめてもらえない』という気持ちが生じることもあった。しかし、夫が自己の新たな一面を気付かせてくれる、家族が児に母乳をあげられている自己を認めてくれるというように『家族の関わりが母親としての自己成長を促進する』とも感じていた。また、家族が食生活を気遣い、搾乳に追い立てられる自分に寄り添ってくれるなど『家族に見守られ大切にされる』ことで、周囲の存在を自己の支えとしていた。

⑬ 【医療者とともに自己の力を発揮していく】

看護師が児に母乳の匂いを嗅がせてくれる場面に触れたことで、自分と児とのつながりが意識されるとともに、児の持つ力に気付き、『看護者が自身に反応する児に気付かせてくれる』存在であると、信頼を寄せていた。また、医師の言葉から児の頑張りを受容するなど『信頼できる医療者とともに児を育む』という気持ちで、母親としての自己の力を発揮していた。

〔考察〕

(1) 早産児の母親が母乳育児を通して親役割を獲得していく過程

早産児を出産した母親は、突然の出産に伴う戸惑いや喪失感を抱える中、早産したにも関わらず【母乳が出る自己と出会う】ことを通して、搾乳を開始していた。その過程で、児の命の源である母乳にこだわるからこそ【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】状況にあった。搾乳を継続し、ようやく直接母乳ができるようになると、児の母親としての実感が得られ【母親としての自己像に接近していく】。さらに、直接母乳を繰り返すことで、児のいる生活を身近に感じ、予期的不安や児を育てる自信のなさから【退院を目前に母親である自己がゆらぐ】体験をしていた。そして、これまでの母乳育児体験を自分なりに意味付けることで、自己肯定感が生まれ、退院前には【自己肯定感を得てわ

が子を育てる決意をする】に至っていた。

このような過程において、母親は、【母乳育児が空想から現実になっていく】、不確かな【児がかけがえのない存在になっていく】一方、早産したことに伴う【喪失体験にとらわれ続ける】体験をしていた。

また、【母乳を出し続ける力が引き出される】、【直接母乳を通して絆が深まっていく】、【母乳を通して成長する児に鼓舞される】など、児から母親としての力が引き出されていた。さらに、【医療者とともに自己の力を発揮していく】、【周囲の存在を自己の支えとしていく】など、周囲に支えられ、力を発揮していた。

早産児を出産した母親の親役割獲得過程において、母親は、出産後、自己とわが子が、イメージしていた“普通の親子”からかけ離れていることを改めて認識することとなる⁷⁾。さらに母親の多くは、母親としてのアイデンティティの認知に何らかの遅れを経験し、特に、産褥早期は、母親役割を獲得していくための精神的な心構えや方向性を持ってない、つまり、母親としてのアイデンティティ拡散を経験している⁸⁾。このように、早産児を出産した母親は、突然の出産により、妊娠期の母親としての自己像を形成していく過程が中断され、またイメージと異なる現実に直面し、母親としての自己を形成していくことが困難な状況に置かれる。そのような、早産児の母親にとって【母乳が出る自己と出会う】体験は、中断された母親としての自己を形成していくきっかけとなる。搾乳は、出産後すぐに実施でき、母親が児に直接与えることができるもの(母乳)を自分の体が作り出すことができることを実感し、児に何かをしてあげたい願望をかなえ、母親である自分にしかできない役割や、直接母乳に向けた希望を持つことを可能にする⁹⁾と言われている。早産児の母親にとって、【母乳が出る自己と出会う】体験は、母親である自分にできることとの出会いであり、母親としての自己の方向性を見出すことにもつながる体験といえる。

母親は、搾乳を継続する過程で、搾乳への義務感にかられ自分を追い込む、母乳が出なくなったら母親としての価値がないと思いき死に搾乳するなど【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】ことを繰り返しており、その格闘は、理想とする母親になれるように、試行錯誤する過程である。また、このような試行錯誤は、搾乳を継続の末、ようやく直接母乳ができるようになるという【母親としての自己像に接近していく】ことを目指す実践である。自己像には、理想とする自己という願望が含まれており、理想化された自己の要素を得るということは、試行錯誤の真剣な作業、有効性や能力の獲得を目指す実践であり、達成までの途中には、挫折や

欲求不満、拒絶や敵意を感じる¹⁰⁾とも言われている。早産児を出産した母親にとって、理想とする母親になる、つまり【母親としての自己像に接近していく】ためには、【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】試行錯誤の体験が必要である。

母親は直接母乳を試行錯誤する中で、児を育てる自信のなさ、児との生活への予期的不安など【退院を目前に母親である自己がゆらぐ】ことを通して、これまでの母乳育児体験を自分なりに意味付けることにより【自己肯定感を得てわが子を育てる決意をする】体験をしていた。これは、母親が、子どもの成長に伴い、常に試行錯誤する新たな経験から、子どもへの関わりの手段を身につけ、迷いや不安、葛藤の中で、行っている育児に確証を得ることを繰り返し、ゆらぎながら母親としての自信を得ていく¹¹⁾ことと一致する。母親が、母乳育児の過程において、母親である自己がゆらぐ体験をすることは、母親としての自信や確信を得ていく過程に必要な作業といえる。

(2) 早産児を出産した母親への母乳育児支援の方向性

母親は母乳育児の過程において、早産したことに伴う【喪失体験にとらわれ続ける】体験をしていた。産褥期の否定的な出産体験において、否定的感情を表出し、わだかまりを消すという情緒的な作業を行い、体験を想起し、経験を統合することで、母親は自己概念を再構成することができる¹²⁾ことから、看護師は、母親が喪失体験と向き合い、現実を受け入れていく過程に寄り添うことが求められる。

母親は【母乳が出る自己と出会う】ことを契機に、実際の母乳育児を通して、徐々に【母乳育児が空想から現実になっていく】体験をしていた。妊娠中に何となく母乳育児を空想している途中、想定外の出産となり、出産後、看護師主導の搾乳ではありながらも、母親は、早産にも関わらず、母乳が出る自分に出会っていた。母乳育児は、母親が母乳をわが子に与えようという意識をもつことから始まる²⁾。早産児を出産した母親にとって【母乳が出る自己と出会う】ことは、母乳育児開始の動機付けに重要であり、そのためには、出産後早期に看護師が搾乳に介入することが必要である。

母親は搾乳継続の過程で、【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】ことを通して、直接母乳に向かいながら【母親としての自己像に接近していく】体験をしていた。【母乳を出し続けなければならない自己と格闘する】には、周囲の助言通りにできない、母乳分泌量に一喜一憂する、義務感にかられて嫌々搾乳をする自分などがあつた。搾乳が

もたらす苦痛を軽減するためには、母乳育児を通して、母乳分泌量を増やすのではなく、児とのつながりを感じる事が大切であると、母親が捉えられるような支援が必要である¹³⁾。母親は、看護師が児に母乳の匂いを嗅がせてくれる場面に触れて、児とのつながりを意識することで、【医療者とともに自己の力を発揮していく】体験をしていた。また、児によって【母乳を出し続ける力が引き出される】、【母乳を通して成長する児に鼓舞される】体験をしていた。母親が、児とのつながりを実感できるように、母乳育児にまつわる児の反応を引き出し、児の持てる力に気付けるように関わることは重要である。

次に、直接母乳を試行錯誤しながら【退院を目前に母親である自己がゆらぐ】ことは、これまでの母乳育児を母親なりに意味付け、【自己肯定感を得てわが子を育てる決意をする】過程に必要な作業であったことから、母親のゆらぐ気持ちに寄り添い、これまでの母乳育児をともに振り返り、意味付けていく関わりが重要である。

さらに、母親は母乳育児の過程で、【周囲の存在を自己の支えとしていく】ことにより母親としての自己を形成していた。極低出生体重児の母乳育児において、夫や祖父母、看護師の支援は、母親の自信を高め、混乱を軽減させるのに、欠かせないものである¹⁴⁾。本研究においても、母乳育児を通して自己の新たな一面に気付かせてくれる夫、母親としての自己成長を促進してくれる家族の存在があり、看護師が家族を含めて支援していくことの重要性が示唆された。

【引用文献】

- (1) 今泉岳雄、未熟児をもつ両親へのケア、伊藤博之編、妊娠・育児期のこのころのケア、メディカ出版、1994、160 - 167
- (2) 堺武男、母乳と相互作用、周産期医学、34 (9)、2004、1411-1413
- (3) Roberta J. Hewat、Research, Theory, and Lactation、Jan Riordan、Karen Wambach、Breastfeeding and Human Lactation 4th Edition、Jones and Bartlett Publishers、2009、740
- (4) 藤本栄子、極小未熟児を出産した母親の心理過程の分析、聖隷学園浜松衛生短期大学紀要、13、1990、100-111
- (5) 和田美恵、小林博子、早産児を出産した母親の児への思いと母乳育児への思い、日本看護学会論文集第38回母性看護、2008、41-43
- (6) 横尾京子、宇藤裕子、木下千鶴、他、NICUにおける母乳育児指導に関する実情と課題、日本新生児看護学会誌、14 (1)、2008、40-47

- (7) 安積陽子、早産児をもつ母親の親役割獲得過程に関する研究、日本助産学会誌、16 (2)、2003、25-35
- (8) Mercer.R.T、Becoming A Mother、Springer Publishing Company, Inc、1995、215-238
- (9) 堤美恵、藤本栄子、黒野智子、他、NICU に入院した早産児の母親の搾乳の体験、せいれい看護学会誌、1 (1)、2010、9-16
- (10) Reva Rubin (1984) / 新道幸恵、後藤桂子訳、母性論 - 母性の主観的体験 -、医学書院、1997、14-28
- (11) 鈴木由紀乃、小林康江、産後 4 か月の母親が母親としての自信を得るプロセス、日本助産学会誌、23 (2)、2009、251-260
- (12) Mercer.R.T、A Theoretical Framework for Studying Factors that Impact on the Maternal Role、Nursing research、30 (2)、1981、73-77
- (13) 高橋斉子、成田伸、早産児の母親が長期間搾乳を継続する過程で直面する困難と搾乳継続を支えた要因、日本母性看護学会誌、12 (1)、2012、19-26
- (14) Tzu-Ying Lee、Ting-Ting Lee、Su-Chen Kuo、The experiences of mothers in breastfeeding their very low birth weight infants、Journal of Advanced Nursing、65 (12)、2009、2523-2531

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- (1) 田中利枝、永見桂子、早産児を出産した母親が母乳育児を通して親役割獲得に向かう過程、日本助産学会誌、査読有、26 (2)、2012、242-255

[学会発表] (計 1 件)

- (1) 田中利枝、永見桂子、権野さおり、藤代朋子、早産児を出産した母親が母乳育児を通して親役割獲得に向かう過程、第 52 回日本母性衛生学会学術集会、2011.9.29、国立京都国際会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 利枝 (TANAKA RIE)

三重県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：90515793